

望まない妊娠に関する女子大学生の知識と態度・行動

岸田泰子, 佐藤龍三郎, 林 謙治 (国立公衆衛生院)

I 緒言

近年、国連やWHOなどにおいて、リプロダクティブ・ヘルス (reproductive health) という言葉が注目を浴び、人間とくに女性の性と生殖に関する保健についての論議が高まっている¹⁾。

リプロダクティブ・ヘルスの概念は、1970年代のフェミニスト運動に端を発するものともいわれるが²⁾、現在では具体的なヘルス・ニーズとして、①家族計画、すなわち望まない妊娠 (unwanted pregnancy) の防止、②安全な分娩、③性感染症 (STD) の防止、④小児保健が4つの柱として重視されるに至っている³⁾。

全ての女性のライフステージにおけるリプロダクティブ・ヘルスを維持・増進することが21世紀に向けての課題であるが、中でも、母性の発達段階にある青年期の女性 (未婚であることが多い) のリプロダクティブ・ヘルスのニーズとして上記4つの柱の①と③が重要である。また特に近年わが国で注目されているのは、わが国においてこの年代の女性の性行動が活発になっているという⁴⁾のに、彼女らのために必要な情報やサービスの提供が十分なされておらず、望まない妊娠やSTDの増加が懸念されるからである。

たとえば、岸田はこの1年間、助産婦として日本家族計画協会「オープンハウス」の電話相談に携わってきたが、女子の相談で多いものに、望まない妊娠やSTDの不安がある。きけば、「正しい性知識がないために、予防することができなかった」、「受診するのが遅れた」という者が多い。また、パートナーにコンドーム装着を言い出せなかったために妊娠の不安を抱えて電話してくる女子も後を断たない。こうした現状から常々、正しい性知識をもつこと、性を肯定的にとらえ直視すること、そして女性が男性に依存しないで自らの意志で避妊行動がとれることはこれからの時代に必要なことであると考えるようになった。

そこで本研究においては、調査内容の選定にあたり、以下のような仮説を立て、その検証を試みた。

- 仮説1. 性・生殖に関する基本的知識をもつ者ほど、望まない妊娠に対する予防行動がとれる。
- 仮説2. 性を肯定的にとらえている者ほど、性・生殖に関する基本的知識をもち、望まない妊娠に対する予防行動がとれる。
- 仮説3. 女性の自立に関して意識の高い者ほど、性・生殖に関する基本的知識をもち、望まない妊娠に対する予防行動がとれる。

なお避妊に関しどのような知識をもち、どのような態度をとるかについては、当然その者の性行動の経験の度合いが影響するものと思われる。そこで本調査では性行動の経験についても調査内容に含めた。

本研究により青年期女性の性行動、性意識の現状と性・生殖に関する知識の程度を知ることは、この分野におけるヘルスニーズの把握にもつながることであり、今後の性教育や地域での母子保健活動にも大いに役立てられるものと期待される。

II 調査方法

1. 対象及び調査期間

東京都内にあるT女子大学およびA女子短大 (いずれも私立文科系) において無記名自記式アンケート調査を実施した。

対象者は、一人の講師が両大学で開講している「女性学」の講義 (全学年対象) に

出席した女子学生全員で、T女子大学73名、A女子短大74名、合計147名から調査票を回収、このうち(白紙回答の1名を除く)146名から有効な回答を得た。

調査は1994年11月に実施したものであり、「女性学」の授業時間内に岸田が調査票を配布・回収した。

2. 調査内容

調査内容は、(1)性・生殖に関する基本的知識、(2)望まない妊娠の予防に関連した態度・行動、(3)性のとらえ方、(4)女性の自立意識、に関する設問からなる。

(1)「知識」に関する設問

いずれもクイズ形式で回答させた。

①男女の性器の機能と解剖についての知識：本設問は厚生省心身障害研究班が実施した高校生の性知識、性行動、性役割観に関する調査⁵⁾(以下「高校生調査」と略す)に準拠して作成した。男女の性器の機能は7つの器官に関して短文を作り、該当する器官名を選択させた。男女の性器の解剖はそれぞれ8つの器官を図で示し、それに当てはまる名称を選択させた。

②避妊・人工妊娠中絶についての知識：(1)11の避妊法の名称を列記し、「大体知っている」、「名前だけ知っている」、「知らない」の3段階で回答させた。(2)避妊・妊娠・人工妊娠中絶に関する正誤とりまぜた短文をクイズ形式で10問示し、正しいと思うものに○、間違っていると思うものに×、わからないものに△をつけさせた。(3)避妊法の情報源についてたずねた。

(2)「態度・行動」に関する設問

①避妊法の選好：11の避妊法を列記し、現在使っているもしくは今後使いたい避妊法を選択させた(2つ以内)。

②避妊に関する態度・行動：(1)避妊は男女どちらが気を使うべきか、(2)性交しようとした時、避妊具がないことに気づいたらどう行動するか、について選択肢から選ばせた。

③人工妊娠中絶についての態度：人工妊娠中絶の条件について6つの意見を提示し、同意できるかどうか、たずねた。

④性行動：つきあっている異性の有無、性交の経験の有無についてたずねた。

(3)「性のとらえ方」に関する設問

性のイメージ(日本性教育協会の全国調査⁶⁾と同一の質問)、自己のからだ観(女に生まれたことをどう思っているか、自分のからだが好きか、初経時の気持ち、初経時の母親の態度)(いずれも「高校生調査⁵⁾」と同一質問)についてたずねた。

(4)「女性の自立意識」に関する設問

①「男は仕事、女は家庭」という考え方についてどう思うか、②女性にとって望ましいキャリア(職業上の経験・能力)、③女性がもっと自立意識をもつことはよいことか、④最も関心のあるもの、⑤女性の自立を阻害すると思うもの、についてたずねた。

III 結果

1 単純集計結果

以下%の数値は有効回答146名に対する割合を示す。

(1)性・生殖・STDに関する基本的知識

①男女性器の機能

正解者の割合を表1に示した。卵巣、精巣、クリトリスについては8~9割以上の高い正解率であった。ついで、精管、龟头、膣が5~6割の正解率で、卵管については受精の場所と知られておらず、正解者は2割に満たなかった。

②女性器の解剖

正解者の割合を表2に示した。全体的に正解率は高く、いずれの器官も半数以上の正解率であった。クリトリスと尿道口は他の器官よりやや正解率が低かった。

③男性器の解剖

正解者の割合を表3に示した。亀頭、ペニス、尿道は7割以上の正解率であったが、全体的に女性器に比べ、正解率が低かった。精巣、精管、陰のうは3～4割の正解率で、精のう、前立腺といった男性の内性器については著しく正解率が低かった。

上記①～③までの23問について正解数の平均値は13.8であった。すなわち、回答者は平均して、性器の機能・解剖に関する知識（以下「機能・解剖知識」と呼ぶ）に関する設問の60%に正答していた。

④知っている避妊法（表4）

基礎体温法、コンドーム法、ピル、膣外射精法は圧倒的に知名度が高く、8割以上が「大体知っている」と答えた。

⑤避妊・人工妊娠中絶の内容についての知識（以下「避妊知識」と呼ぶ）

避妊・人工妊娠中絶に関する設問10問の設問ごとの正解率を表5に示した。平均正解数は3.4であった。避妊の設問ではペッサリーがどういう形状のものがあまり知られておらず、正解者は2割に満たなかった。また、妊娠週数の数え方は3割弱、優生保護法により人工妊娠中絶できる期間は2割強しか正解者がいなかった。

⑥避妊の情報源（表6）

7割以上が「学校」と答え、ついで「雑誌」、「友人」、「本」が3～4割であった。

（2）望まない妊娠とSTDの予防に関連した態度・行動

①避妊法の選好

現在使っているもしくは今後使いたい避妊法を表7に示した（2つ以内の複数回答）。圧倒的にコンドーム法が挙げられた。ついで基礎体温法が約4割であった。ついで、オギノ式、ピル、性交中絶法（膣外射精）、錠剤・ゼリー・フィルムが約1割だった。洗浄法、女性不妊手術を選んだ者はいなかった。

②避妊に関する態度・行動

(1)「避妊は男女のどちらが気を使うべきか」の間には、「男女とも」と答えた者が88.4%であった。「女性の方」と答えた者は2.1%、「男性の方」は8.9%であった。

(2)「性交をしようとした時、避妊具がないことに気づいたらどうするか」の間には、66.9%が「性交するのをやめる」と答えたが、「膣外射精をしてもらおう」と答えた者が14.5%おり、「そのまま性交を続ける」と答えた者が0.7%いた。

③人工妊娠中絶についての態度（表8）

レイプ、母体の健康を害する場合は9割以上が、ついで経済的理由、胎児に異常がある場合は7～8割が同意できるとし、大多数が条件付きで中絶を認める傾向があった。避妊に失敗したときは認められてよいと答えた者は約半数で賛否両論に分かれた。どんな場合も中絶を認めないとする厳格派はきわめてわずかであった。

④性行動

(1)つきあっている異性の有無は「現在いる」36.3%、「以前いた」34.9%、「いない」28.8%であった。(2)性交経験は「ある」41.1%、「ない」58.9%であった。

（3）性のとらえ方

①性のイメージ

「性」とか「セックス」という言葉にどのようなイメージをもっているか、という質問への回答を表11に示した。なお表9には比較のため日本性教育協会の全国調査⁶⁾による女子大学生に対する同一質問の回答を併せて示した。今回の調査で回答者は、女子大学生の全国平均に比べ、「性」あるいは「セックス」をより「明るい」、「楽しい」、「よい」ものと捉えている傾向がある。

②からだ観

(1) 自己のからだ観として「女にうまれたこと」をどう思うかたずねたところ、「よかった」64.1%、「男の方がよかった」17.2%、「どちらでもよい」18.6%で肯定的意見が多かった。(2)「自分のからだが好きかどうか」は「好き」24.7%、「あまり好きではない」43.8%、「きらい」9.6%、「よくわからない」21.9%であった。(3)初経(初潮)を迎えたときの気持ちは、「とてもうれしかった」3.4%、「わりとうれしかった」9.6%、「すこしうれしかった」15.8%、「あまりうれしくなかった」23.3%、「全然うれしくなかった」17.1%、「なんともいえない」24.7%、「おぼえていない」6.2%で肯定的感情をもった者が28.8%、否定的感情をもった者が40.2%であった。(4)初経時の母親の態度は「とても喜んでくれた」26.2%、「わりと喜んでくれた」35.2%、「普段と変わりなかった」30.3%、「あまり喜んでくれなかった」1.4%、「全然喜んでくれなかった」0.7%、「おぼえていない」6.2%で、母親が肯定的にうけとめてくれた者は61.4%、否定的だった者は2.1%だった。

(4) 女性の自立に関する意識

(1)「男は仕事、女は家庭」という考え方について、「賛成」4.1%、「どちらかといえば賛成」19.3%、「どちらかといえば反対」44.1%、「反対」28.3%、「わからない」4.1%であった。すなわち肯定的意見は23.4%、否定的意見は72.4%であった。(2)「女性にとって望ましいキャリア」については、「結婚まで」2.7%、「出産まで」12.3%、「育児が終わったら再就業する」50.7%、「継続して職業を続ける」24.0%、「わからない」10.3%で、「職業はもたない方がよい」と答えた者はいなかった。(3)「女性が現在よりもっと自立意識をもつということ(男性に依存しない意識をもつこと)についてどう思うか」の問には、「とてもよい」55.5%、「どちらかというともよい」39.0%、「あまりいいとは思わない」2.1%、「いずれの考えでもない」3.3%で、「よくない」と答えた者はいなかった。すなわち女性の自立意識を肯定する者は94.5%であった。(4)「最も関心のあるもの」を尋ねたところ(複数回答、2つ以内)、「恋愛のこと」が66.4%で最も多く、ついで「趣味」52.7%、「友人のこと」28.1%、「結婚や育児のこと」19.2%で、「政治・社会問題」と「家族のこと」はともに8.2%、「その他」14.4%だった。(5)「女性の自立を阻害すると思うもの」(複数回答、いくつでも)の問いに対しては、「男性中心の社会」を選んだ者が89.7%と最も多く、ついで「就職難(雇用問題)」87.7%、「低賃金」58.9%、「家事労働」56.8%、「日本の“家制度”」51.4%、「結婚」20.5%、「子供の数が多いいこと」11.0%であった。

(5) T女子大とA女子短大の比較

(1)の①～③で示した、性器の機能と解剖についての知識の平均正答数がT女子大7.5、A女子短大5.8であった。また(1)の⑤で示した避妊・人工妊娠中絶の内容についての知識の平均正答数もT女子大14.6、A女子短大12.8で開きがあった。しかし性のとらえ方、性行動、女性の自立に関する意識に関してはさほど差はみられなかった。

2 クロス集計結果

仮説に基づいて、それぞれクロス集計をし、カイ2乗検定をおこなって有意差をみた。なお、避妊・人工妊娠中絶に関する知識(以下「避妊知識」)、「機能・解剖知識」のそれぞれで、平均正答数を上回る群を「上位群」、下回る群を「下位群」とした。

(1) 仮説1「性・生殖に関して基本的知識をもつ者ほど、望まない妊娠に対する予防行動がとれる」について

“性・生殖に関する知識”(「機能・解剖知識」、「避妊知識」)と“予防に関連した態度・行動”をクロス集計した。“予防に関連した態度・行動”として①避妊法の選好、②避妊に対する考え方、③人工妊娠中絶についての態度をとりあげた。その結果、有意水準5%で知識の上位群と下位群の間に差はみられなかった。

(2) 仮説2「肯定的に性をとらえている者ほど、性・生殖に関する基本的知識をも

ち、望まない妊娠に対する予防行動がとれる」について

“性のとらえ方”と“知識”、“性のとらえ方”と“態度・行動”をクロス集計した。具体的な項目として、“性のとらえ方”としては①性のイメージ、②「女に生まれてよかったと思う」、③「自分のからだが好き」、④初経時の気持ち（「とてもうれしかった」、「すこしうれしかった」、「わりとうれしかった」）、⑤初経時の母の態度（「とてもよろこんでくれた」、「わりと喜んでくれた」）をとりあげた。これも、「機能・解剖知識」および、「避妊知識」とクロス集計した。その結果、性のイメージとして「明るい」(P<0.05)、「楽しい」(P<0.01)ととらえている者の方が性に関する知識の正答数が有意に多かった。その他の項目については有意水準5%で差は認められなかった。

(3) 仮説3「女性の自立に関して意識の高い者ほど、性・生殖に関する基本的知識をもち、望まない妊娠に対する予防行動がとれる」について

“女性の自立に関する意識”と“知識”をクロス集計した。具体的な項目は、女性の自立に関しては、「女性がもっと自立意識をもつことはよい」に肯定的な者と「男は仕事、女は家庭」という考えに否定的な者をあげ、「機能・解剖知識」と「避妊知識」とクロス集計した。また、“女性の自立に関する意識”と“予防に関連した態度・行動”をクロス集計した。いずれも有意水準5%で差はみられなかった。

(4) つきあっている異性の有無、性交経験と性のとらえ方

つきあっている異性の有無と性交経験を「性のとらえ方」とクロス集計したところ、有意水準5%で差はみられなかった。しかし、性交経験のある者は、性を「明るい」(P<0.01)、「楽しい」(P<0.05)、「きれい」(P<0.05)、「恥ずかしくない」(P<0.05)ととらえる者が有意に多かった。

(5) つきあっている異性の有無、性交経験と性・生殖に関する知識

つきあっている異性の有無、性交経験と「機能・解剖知識」、「避妊知識」をクロス集計したが、有意水準5%で差はみられなかった。

(6) その他

望まない妊娠に対する予防行動のなかで特に「避妊法の選好」と「人工妊娠中絶に対する態度」をクロス集計して、避妊法の選び方により人工妊娠中絶に対する態度に違いがあるかをみたところ、「ピル」を選んだ者は「避妊に失敗したときは人工妊娠中絶を認めてよい」とする者が比較的多かった(P<0.10)。

IV 考察

1. 調査対象について

今回対象として選んだのは、都内2校の私立女子大学の学生である。T女子大学とA女子短大はいずれも私立文科系大学であり、社会的背景が似ている。また、1校のみでは対象とする人数が少なく、データの信頼性が低くなることより、2校の結果を合併して解析した。両校の結果をみると性のとらえ方、性行動の経験率については有意な差はなかったが、性器の機能・解剖に関する知識、避妊についての知識はT女子大学生の方が有意に高い正答率であった。このことは、4年生大学と短期大学の違いから生じたものと考えられる。本調査結果にも示されたようにわが国では、性に関する科学的知識の情報源として（高校までの）学校教育の比重がきわめて大きいので、高校教育までで得られた知識の理解度が高かったことも一因と思われる。今後追跡調査をする場合は、大学による差を考慮する必要があると考えられる。

2. 望まない妊娠に関する知識

まず基本的知識では特に男性の性器に関する知識が不十分かつ不正確であった。中でも男性の内性器、たとえば精巣、精のう、前立腺については「高校生調査」⁵⁾の女子高校生よりも正解率が低いが、このことは（中学、高校の理科・保健等で）教育されてから期間が経ってしまったこと、また日常生活で必要性が強く感じられていなかったためとも考えられる。しかし男性の性器に関する知識が足りないことは、妊娠

の機序についての根本的な理解の不足の反映ともみられ、問題である。

しかし、女子高校生に比べ、女性器の解剖については正解率が高かったことは、年齢を経て性行動が活発化し、マスメディア等からの情報量が増えていることを想像させる。あるいは性成熟の発達段階のなかで、必然的に自らの性器に関心を示し始めているのかもしれない。女子が女性器を正しく認識することは、望まない妊娠の予防のために不可欠なことは言うまでもない。

また今回の調査では、個々の設問でみると女子大学生の性に関する知識の程度は浅いながらも、性器の機能や解剖という基礎的な項目の正解率が高い者は避妊、人工妊娠中絶に関しての設問でも正解率が高いという傾向がでた。やはり、まずは基礎的知識をしっかりと固め、子細な情報を提供していくことが大切であろう。菅井ら⁹⁾、高校生の性周期に関する知識が不十分で非系統的であることを指摘しており、系統だった教育の必要性が感じられた。

次に、避妊・人工妊娠中絶に関する知識では、妊娠週数の数え方や中絶可能な週数も正確には知られておらず、このことは将来、望まない妊娠や受診の遅れ、母体に危険な中期中絶を引き起こす結果になりかねない。

避妊の情報源については今回調査した女子大学生は、主に「学校」と答えているが、このことは、いかに若者達が学校以外の他の機関や方法によって情報を得ることが困難かを想像させるものである。また学校が教育したことが実際に役に立つ避妊指導であったかどうかとも問題である。地域には避妊についての専門的知識の提供をする場が本来もっとあるはずなのに、利用されていないのか、数が不足しているのか、情報源として機能していないのは残念である。今後は性に関する情報やサービスの提供を行う機関や施設をもっと増やし、広報活動をもっと盛んにして欲しい。また避妊に関する情報源はマスメディアからという回答も多かったが、情報化社会といえども必要な情報が正しく伝わっているとは限らないし、本当に必要な情報が若者達に提供されているとは言えない現状である。

岸田は数年の臨床での助産婦経験の中で、望まない妊娠により人工妊娠中絶を繰り返したため不妊症となった症例に出会い、望んでいるのに妊娠できない悲しい想いと、なぜもっと予防のための方法を講じられなかったのかという歯がゆい想いを何度となくしてきた。このような保健指導には高度の専門性が要求される。それゆえ医師や女性の性・生殖の専門職である助産婦の活用も切に望まれる。

3. 望まない妊娠の予防に関連した態度・行動

今回の調査において、「望まない妊娠の予防に関連した態度・行動」として指標化したのは僅かな数の項目であり、本調査による予防行動の把握には限界のあることを承知している。またここで把握された行動は自己申告によるものであり、回答者の中には実際に予防行動をとっている者もいれば、頭の中で考えているだけの者もいるだろう。しかし避妊は望まない妊娠の重要な予防行動である。したがって、避妊法の選び方や避妊に関する意識を知ることができたことは予防行動を知る手がかりとなると考えた。

性行動についてみると、集団のなかに性交経験者が4割以上いるということは、望まない妊娠に対するリスクがあり、この予防を図ることは公衆衛生上、意義深い。性行動が低年齢化していると言われるが⁴⁾、その割合からすると、いま、全ての大学生を対象にリプロダクティブ・ヘルスのための教育がなされるべきである。

調査において回答者は、避妊法に圧倒的にコンドームを選んでいる。反面、膈外射精を選んだものが約1割いること、避妊具がないときでも膈外射精で性交すると答えた者が1割強もいることなど、徹底した避妊教育の必要性を強く感じる結果であった。

他に避妊法の選好の中で注目したいのは、経口避妊薬（ピル）を選んだ者が約1割ということである。ピルについては、「知らない」と答えた者が1人もいないほど知名度は高かった。そして、避妊の内容に関する設問の中で、確実な避妊法であることを4割以上の者が正答した。しかし、副作用や服用することによって効用もあるということを知っていた者は2割にすぎなかった。ピルはフランス、イギリス、ドイツに

において10～20代の避妊法として主要な方法である¹⁰⁾。ただ日本においては、正式に認可されておらず、手に入りにくいことやSTDの予防に効果がないことから主要な方法とはされておらず、このことを反映して約1割の者しか選ばなかったのかも知れない。若年者の場合、個々に応じて、どのような避妊法が適しているかは異なる。たとえば、性交回数が頻繁で、パートナーが1人に限られていればピルが最も適している。さらにピルには月経痛の軽減や卵巣癌予防というメリットもある。今回の調査で、このような避妊法の特徴がよく知られないまま、選択の幅が狭められ、ピルが選ばれないことは残念である。そういった意味でも、専門的に個々に応じた避妊法について気軽に相談できる機関や人材が身近にあればと思う。

今回の調査で、避妊効果が高く、近代的避妊法といわれるピルやIUDは少数にしか選ばれず、コンドーム法が圧倒的に選ばれたのは、コンドームの方が安価であること、ほとんどが未婚者である学生にとって妊娠ということがさほど切実な問題とは認識されていないこと、昨今マスコミによりエイズ予防対策としてコンドームの有用性が盛んに報道されたことなどが考えられる。

なお、今回ピルをえらんだ約1割(17人)の者はもう1つの避妊法として、コンドーム(14人)、IUD(2人)という比較的確実な避妊法を選んでいて、またピルを選んだ者は、人工妊娠中絶の可能な期間の設間に対し、ピル以外の避妊法を選んだ者より有意に正解率が高かった($P<0.05$)。すなわち、中絶への関心が高く、避妊法の選択にあたって確実性を理由にしていることが伺える。さらに、ピルを選んだ者は「避妊に失敗したとき」中絶に同意できるという意見が比較的多く($P<0.10$)、出生コントロールの動機が強いことが伺える。

女性が、産む・産まないの自己決定をするときの重要な論議の1つに人工妊娠中絶の問題がある¹¹⁾。今回の調査で大多数の女子大学生は、様々な条件付きながら中絶に同意できるとした。本調査で提示した中絶についての諸条件は、現在世界各国でとられている法規制にもとづいたものである。たとえば、北アメリカやヨーロッパ諸国では妊娠初期の中絶は女性の要請のみで行われる¹²⁾。中絶を容認する考えは一面では女性の自己決定権の拡大の反映ともみられる。ただ、妊娠や避妊に関する知識が不十分な段階で中絶を容認する考え方は危険である。そして、安易に妊娠をしても中絶という手段がとれるという発想をさせるようなことのないよう、生命の尊厳をもふくめた性教育を考えていく必要がある。現段階で、回答者らの性・生殖に関する知識は不十分であることから、望まない妊娠の可能性もあり、不幸にして人工妊娠中絶に発展することも考えられる。したがって、人工妊娠中絶のもつ危険性を含めた教育を考えてもよいのではないか。

4. 性のとらえ方について

今回の調査で女子大学生は、性のイメージを明るい、楽しい、よい、重い、恥ずかしいととらえる者の方が多く、約6割が自己の性を肯定的にとらえていた。肯定的に性をとらえることは、性を直視する姿勢につながるであろう。性教育の第1歩は、自分の中にある性への偏見や抑圧を見つめ排除する事から始まる¹³⁾ともいわれている。

今回の調査結果からは、自己の性を肯定的にとらえているか否かで知識の多さに差はなかったが、性のイメージを明るい、楽しいととらえた者に関しては有意に知識が多かった。教育の現場などではまだまだ「性」がタブー視されている現状の中でこのことは、性へのこだわりが薄らいでいることを象徴している。性に関する知識を得るためには性を直面できる態度が必要であるから、今後の教育の上でも、性のイメージを肯定的にとらえさせることは意義があるといえる。しかし石橋らは、性のモラルや意識は経験的な要素が強く関与するという¹⁴⁾とっており、経験を通して、性に関する意識が変容することも考えられる。

今回の結果を「高校生調査」⁵⁾と比較すると、高校生女子より今回の回答者の女子大学生の方が、自己の性を肯定的にとらえる割合が高かった(高校生女子で「女に生まれてよかった」は53.7%)。このことは、女性で自己の性に肯定的感情を抱く者の

割合が年齢とともに高くなっていくという見方と一致している。

また、初経時の母の態度から母子関係の一端を調査したが、半数以上の母親が肯定的態度で接していた。過去の母子関係は、良好な現在の母子関係、母性意識を促進する¹⁵⁾ という報告もあり、将来の母性意識の高揚につながるのではなからうか。地域や学校における母親への初経教育にも参考になる知見であろう。

5. 女性の自立意識について

カイロの国際人口開発会議(1994年)において合意されたように、女性は自主的に「産む・産まない」を自己決定し、その自己決定権(リプロダクティブ・ヘルス/ライツ)を確立する必要がある³⁾。こうしたことを女性は意識しているのかどうか定かでない。そこで自己決定できる能力を1つの「自立」とみなし、その意識を調査したが、いささか漠然とした言葉であり、またセクシュアリティの側面だけでなく、社会的側面からも考えなければならないことがたいへん難しく、はっきりとした結果を得ることはできなかった。とくに「女性の自立」に関しては、測定基準が難しく設問に苦労したところである。

今回の調査では、「女性の自立意識」を「男性に依存しない意識をもつこと」としてたずねた。そして大多数の女子大学生が今よりもっと自立意識をもつということはいよいと思っていることがわかった。しかし避妊において、「男性が気を使うべき」と考える者が約1割おり、また「性交しようとした時、避妊具がないことに気づいたら膣外射精してもらおう」と答えた者も1割強いた。このことから、男女平等といわれている風潮の中でも「性」においては男性に依存的な傾向も依然残っているといえよう。

また「女性にとって望ましいキャリア」については、出産や結婚に関係なく「継続して職業を続ける」が2割強、「育児が終わったら再就業する」が5割いたが、この傾向は総理府の全国調査⁷⁾とほぼ一致している。継続的に職業を続けることの難しさは、雇用機会の上で女性が不利を被っている社会情勢を反映しているように考えられる。このことは回答者の圧倒的多数(約9割)が「女性の自立を阻害すると思うもの」のなかで、就職難(雇用問題)や男性中心の社会を挙げていることにも表れているといえよう。

今回の調査により、女子大学生の自立を志向する意識の高さは十分に伝わってきたが、仮説として立てた女性の自立意識および態度・行動と知識との関連は明らかでなかった。今後さらにこのテーマを追求するなら、公衆衛生分野だけでなく多方面からのアプローチ方法を考慮するべきであろうという課題を残した。

しかしいずれにせよ、女性の社会進出が今後さらに進んでいく中で、女性が自ら、性と生殖に関する健康を保持増進することの重要性は高まるので、今後設問を吟味し追研究も考えたい。

6. 知識と態度・行動との関連

今回調査にあたって立てた3つの仮説の中でも第1の仮説「基本的性知識をもつ者ほど、予防行動がとれる」は、私が最も重視した仮説であった。しかし調査の結果、性知識の多い者とそうでない者との間で望まない妊娠やSTDに関して予防行動がとれるかどうかには差はみられなかった。この結果に対して二つの解釈が考えられる。一つは測定方法(設問)の問題であり、測定方法の感度が低かった(設問が仮説の検証にとって必ずしも適切でなかった)可能性がある。このような質問紙調査で予防行動を客観的に把握することの困難さは先にも述べたが、今後さらに改善をはかってゆきたい。

もう一つ考えられることは、避妊やSTD予防に関する行動にとって必要な知識は、きわめて特殊な知識であり、一般的な知識の豊富さとは元来無関係なものなのではあるまいかということである。

竹井も高校生の性行動の調査の中から、性交行動にかかわる意志や態度のあいまいさ、避妊についての不確実さを指摘している¹⁶⁾。つまり、性交への衝動にかられたとき、性に関する事前の知識など関係せず、知識があるからといって望まない妊娠

やSTDに対しての予防行動がとれるとは限らないのではないか。だとすると、性に関しての基礎的な知識を与えることにとどまらず、もっと望まない妊娠とSTDに的を絞った特殊な(専門家の手も借りた)教育・指導がなければ意味がないといえる。現にSTDの中でエイズ・HIVの知識のみがとび抜けて高いのも、近年エイズ・HIVが若者にとって緊急の問題との認識からこれに的を絞った(つまり特殊な)、集中的な教育が行われたことの結果であり、このような特殊な知識の教育方法が有効なことの証といえる。青年期女性にとっての望まない妊娠とエイズ以外のSTDのヘルス・ニーズとしての重要性は、今日残念ながら広く認識されているとは言い難い状況にある。しかしわが国においても、本調査によっても明らかになったように、緊急に対策を要する問題として、現実に存在しているのであり、このような特殊なテーマに対して的を絞った集中的な性教育と保健指導等が必要であることを強調したい。そのためには、リプロダクティブ・ヘルスに関して専門性を備えた人材の育成と配置が何よりも重要と思われる。

謝辞

本調査にご協力いただいた大林道子先生に深謝いたします。

文献

- 1) Mundigo, A. I.: Reproductive health; Definition and research challenges, (Discussion Paper Series, No.94-3), Nihon University Population Research Institute, Tokyo, 1994
- 2) 阿籙誠: カイロ会議と人口問題; 世界と日本, 現代性教育研究月報, 日本性教育協会, 12(12):1-5, 1994
- 3) ICPD: Programme of action of the United Nations International Conference on Population and Development, 1994
- 4) 島崎継雄: 高校生後半から上昇する性交経験率, 現代性教育研究月報, 日本性教育協会, 12(12):12-15, 1994
- 5) 福島富士子: 高校生の性知識、性行動、性自認に関する研究; 教材づくりとの関連から; 平成5年度国立公衆衛生院専門過程特別研究, pp. 1-10, 1994
- 6) 日本性教育協会: 青少年の性行動, わが国の中学生・高校生・大学生に関する調査報告, 日本性教育協会, p. 59, 1994
- 7) 江原由美子、長谷川公一、山田昌弘、天木志保美、安川一、伊藤るり: 「ジェンダーの社会学; 女たち男たちの世界」, 新曜社, 1990
- 8) 安沢菊江、田村千鶴: 現代青年の性意識・性行動に関する実態調査, 思春期学, 7(3):256-262, 1989
- 9) 菅井亮世、北原毅人、北村邦夫、荒堀憲二、松本清一: 高校生の性知識, 思春期学, 2(3):75-79, 1984
- 10) 松山榮吉: 10代の避妊法, 産婦人科治療, 66(3):313-317, 1993
- 11) 斉藤千代: 見えない道; 産む、産まない、産めない, あごら28号, BOC出版部, 1983
- 12) 芦野由利子: 世界の人工妊娠中絶, 家族計画便覧, 日本家族計画協会, p. 77-88, 1994
- 13) 近藤文子: 成長発達と性教育のあり方, 産婦人科治療, 66(3):329-333, 1993
- 14) 石橋智昭、武田敏: 大学生女子の性モラルに関する調査研究, 思春期学, 8(3):331-336, 1990
- 15) 村井文江、茅島江子、前原澄子: 女子大学生の母性意識についての検討, 思春期学, 9(3):247-253, 1991
- 16) 竹井操: 高校生の性意識・性行動について, 思春期学, 10(1):29-34, 1992

表1 男女性器の機能に関する正解者割合 (N=146)

器官名	正解者割合 (%)
卵巣	97.2
精巣	93.1
クリトリス	82.8
精管	64.8
亀頭	57.2
陰	55.9
卵管	15.9

表3 男性器の解剖に関する正解者割合 (N=146)

器官名	正解者割合 (%)
亀頭	78.3
ペニス	75.7
尿道	70.2
精巣	46.8
精管	42.1
陰のう	32.4
精のう	12.9
前立腺	3.6

表2 女性器の解剖に関する正解者割合 (N=146)

器官名	正解者割合 (%)
卵巣	87.6
子宮	77.2
陰口	76.0
大陰唇	74.5
小陰唇	73.8
卵管	69.7
クリトリス	56.8
尿道口	50.7

表4 知っている避妊法 (N=146)

	大体知っている	名前だけ知っている	知らない
オギノ式	82(56.2%)	52(35.6%)	12(8.2%)
基礎体温法	125(85.6%)	21(14.4%)	0(0.0%)
性交中絶法(陰外射精)	118(80.8%)	19(13.0%)	9(6.2%)
コンドーム	145(99.3%)	1(0.7%)	0(0.0%)
洗浄法	47(32.2%)	41(28.1%)	58(39.7%)
錠剤、ゼリー、フィルム	85(58.2%)	55(37.7%)	6(4.1%)
ペッサリー	56(38.4%)	72(49.3%)	18(12.3%)
IUD(リング)	65(44.5%)	55(37.7%)	26(17.8%)
ピル	117(80.1%)	29(19.9%)	0(0.0%)
女性不妊手術	77(52.7%)	56(38.4%)	13(8.9%)
男性不妊手術	67(45.9%)	60(41.1%)	19(13.0%)

表5 避妊・人工妊娠中絶に関する設問の正解者数と割合

設問の内容	正解者 (%)
1. 基礎体温表から妊娠可能日の見方	74(50.7%)
2. コンドームによる避妊効果	61(41.8%)
3. コンドームによる避妊の失敗	73(50.0%)
4. ペッサリーの形状	20(13.7%)
5. 避妊フィルムの効果	72(49.7%)
6. ピルの避妊効果	65(44.5%)
7. ピルの副作用	31(21.2%)
8. 低用量ピルの副作用	38(26.0%)
9. 妊娠週数の数え方	40(27.4%)
10. 優生保護法により人工妊娠中絶できる期間	32(21.9%)

表6 避妊の情報源(複数回答: 2つ選択) (N=146)

学校	105(71.9%)
雑誌	67(45.9%)
友人	47(32.2%)
本	46(31.5%)
親	2(1.4%)
その他	7(4.8%)
学んだおぼえがない	10(6.8%)

表7 現在使っているもしくは、今後使いたい避妊法
(複数回答：2つ以内選択) (N=146)

コンドーム	138(94.5%)
基礎体温法	64(43.8%)
オギノ式	21(14.4%)
ピル	17(11.6%)
性交中絶法(膈外射精)	14(9.6%)
錠剤、ゼリー、フィルム	11(7.5%)
ベッサリー	2(1.4%)
IUD(リング)	2(1.4%)
男性不妊手術	1(0.7%)
洗浄法	0(0.0%)
女性不妊手術	0(0.0%)

表8 人工妊娠中絶について同意できる意見
(複数回答) (N=146)

レイプや近親姦による妊娠の場合は認められてよい	97.9%
母体の健康を害する場合は認められてよい	93.1%
経済的理由でなら認められてよい	78.6%
胎児に異常がある場合は認められてよい	71.7%
避妊に失敗したときは認められてよい	45.5%
妊娠初期なら理由を問わず中絶は認められてよい	25.5%
どんな場合も認められるべきではない	2.1%

表9 女子大学生の「性」のイメージ (%)

	今回調査 N=146	日本性教育協会調査 N=488
明るい	24.1	18.2
暗い	1.4	4.9
どちらともいえない	74.5	73.0
楽しい	35.9	26.0
楽しくない	2.8	2.9
どちらともいえない	61.3	67.2
きれい	12.4	10.2
きたない	12.4	9.8
どちらともいえない	75.2	76.0
よい	38.6	28.7
わるい	3.4	3.9
どちらともいえない	58.0	63.5
軽い	6.2	7.8
重い	49.0	35.5
どちらともいえない	44.8	53.7
恥ずかしい	38.6	38.7
恥ずかしくない	28.0	15.6
どちらともいえない	33.4	42.0

注) 比較のため日本性教育協会が1993年に同一質問で実施した
全国調査の結果³⁾を併せて示した。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



緒言

近年、国連や WHO などにおいて、リプロダクティブ・ヘルス(reproductive health)という言葉が注目を浴び、人間とくに女性の性と生殖に関する保健についての論議が高まっている 1)。

リプロダクティブ・ヘルスの概念は、1970 年代のフェミニスト運動に端を発するものともいわれるが 2)、現在では具体的なヘルス・ニーズとして、 家族計画、すなわち望まない妊娠(unwanted pregnancy)の防止、 安全な分娩、 性感染症(STD)の防止、 小児保健が 4 つの柱として重視されるに至っている 3)。全ての女性のライフステージにおけるリプロダクティブ・ヘルスを維持・増進することが 21 世紀に向けての課題であるが、中でも、母性の発達段階にある青年期の女性(未婚であることが多い)のリプロダクティブ・ヘルスのニーズとして上記 4 つの柱の と が重要である。また特に近年わが国で注目されているのは、わが国においてこの年代の女性の性行動が活発になっているという 4) のに、彼女らのために必要な情報やサービスの提供が十分なされておらず、望まない妊娠や STD の増加が懸念されるからである。

たとえば、岸田はこの 1 年間、助産婦として日本家族計画協会「オープンハウス」の電話相談に携わってきたが、女子の相談で多いものに、望まない妊娠や STD の不安がある。きけば、「正しい性知識がないために、予防することができなかった」、「受診するのが遅れた」という者が多い。また、パートナーにコンドーム装着を言い出せなかったために妊娠の不安を抱えて電話してくる女子も後を断たない。こうした現状から常々、正しい性知識をもつこと、性を肯定的にとらえ直視すること、そして女性が男性に依存しないで自らの意志で避妊行動がとれることはこれからの時代に必要なことであると考えようになった。そこで本研究においては、調査内容の選定にあたり、以下のような仮説を立て、その検証を試みた。